

錦秋の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員に於かれましては、益々ご清福の段、大慶至極に存じ上げます。

皆様には日頃より当支部運営に際して特段のご高配を賜り、深甚なる敬意を表すと共に、倍旧のご支援を伏してお願ひ申し上げねばなりません。

今月は十月八日・九日、靖国神社及び明治神宮で開催された日本青年協議会並びに日本協議会結成四十周年記念大会に於いて、京都大学教授 中西輝政氏が記念講演された「明治維新と現代の国難・青年はいかに生きるべきか」を、本県の日本会議宮崎 事務局長代行 黒木雅裕氏が講演骨子として纏めておられますので、ご了承を得て以下にご紹介させて戴きます。

一・平和と思われた戦後日本は、ギリギリのところまで支えられて来た

昭和四十一年、北京から日教組の幹部宛てに送られた秘密文書の暗号通信が解読され、それは「日本国民を皇室から引き離す事」が日本革命の要諦であり、それが日本を丸ごと攻撃することにつながるのと指令があった事等を、今村均元大将が世に公開し、そんな戦後史の秘話が今次々と明らかになってきている。

二・「国難」について

三・一一以降、「国難」という言葉が色々な文脈で使われるようになった。確かに戦後未曾有の死者・行方不明者を出し、原発問題も含め甚大な災害であるが、本当の国難はこれから来るのではないかと考える。

我が国にとっての歴史的国難と言えば、蒙古襲来、黒船来航、ポツダム宣言受託の三つが挙げられるが、この位のクラスを国難というのではないか。

日本の地理的位置、地政学上逃れられない宿命として、三つの国難は来たが、そういう意味で昨年の尖閣事件は、中国の膨張が再び始まった中で宿命的に起きたと言える。

三・「第三の開国」について

TPPは第三の開国などと軽々しく言うが、レベルが違いすぎて明治維新とは比べられない。戦後の改革はGHQによる改革だが、古い時代の障害を日本人が自分自身で壊したところに明治維新の偉さがある。

王政復古の号令により、幕藩体制から天皇親政に変革したが、改革には、精神の根柢をどこに置くかが重要だ。

昨今の改革を見ると、政治改革、構造改革、教育改革、大学改革、〇〇改革と色々あり、改革には精神（スピリット）をどこに見出すかが大事であるが、現代の日本の改革には指導的精神が見当たらない。

四・明治維新の凄さは青年による改革であったこと

幕末の志士の平均年齢は若く、大西郷でも約四十歳で、殆どが三十代で明治維新を迎えた事が重要であり、明治維新はいつまで続いたのかと問われれば、ポーツマス条約をもって終ったと私は答える。その間、三十有余年ある。

日露戦争勝利により北辺の脅威を撃退し、アジアを救ったからであり、そこで攘夷が完結したが、日露戦争当時、国の指導者であった桂太郎、小村寿太郎、軍の最高指導者であった乃木希典、東郷平八郎、児玉源太郎らは五十代だった。

明治維新とは尊皇攘夷運動の完成であるが、そこで青年達がどう働いたかがポイントと考える。

青年が国家と共に生きる。国家のために生きるというのはどの国でも同じ。若者が国の運命を我が事として捉え、動き、そして、壮年期に国の指導者になる。それが明治維新であった。

よって、青年が国の変革に挑むという事は、物理的、生物学的な必然である。

五・中華大陸との対峙

古代から、中華大陸との対峙、日中両文明の対決があり、そしてそれは素晴らしい日本の文明を生み出したという側面がある。

ただ、あちらさんはどう考えているか分からないが・・・(笑い)

中国は東アジアだけでなく、何が良いのかわからないが、ヒマラヤや砂漠等にもずっとちよっかいを出し続けている。しかし彼らが元気になればチャンス。

日本人の根性を磨くチャンスであり、良い練習相手が現れたと思えばいい。長い歴史を俯瞰すれば中国の膨張は、日本史的規模でのチャンスである。

こうした大局観を持ちつつ、目の前の問題にきちんと対処すべきではないか。

六・尖閣が中国に支配されるシナリオ

今年七月、中国空軍が、日中の中間線（EEZの境界）を越えてきた。

また、八月、中国空軍の戦闘機が、同境界で、日本の情報収集機（P3C、E2C）のプロペラ機を追尾した。プロペラ機が戦闘機に叶う筈がない。現在、尖閣諸島は日本が実効支配しているが、実効支配している根拠は二隻の海保の巡視船が常時監視していることにある。

それを担保するために、対潜哨戒機P3Cなどが那覇空港から毎日飛び発ち空から守っているが、これがいわゆるエアカバーである。

しかし、中国の動きはエスカレートしており、現在の状況が崩れつつある。今回、中国の哨戒機があと五十kmまで迫った。これは戦後初めての事である。

日本の哨戒機は本来空自の戦闘機が護衛すべきだが、その覚悟は政府に無い。このまま事態が進展すると日本のP3Cは危険回避のため退かざるを得ず、そうなれば丸腰の二隻の巡視船だけが残り、中国空軍の領空侵犯が起こる。

こうして平和的に尖閣は中国の実効支配に移る事となり、現在も中国の漁業監視船、海洋調査船が入ってきているが、我々の想定より一步も二歩も中国は早く、国家権力の全てを挙げて尖閣、東シナ海、南シナ海等に進出している。

六、琉球奪還の野望

しかし、もっと怖いのは、昨年の尖閣事件後の中国での反日デモの横断幕に「琉球奪還」とあった事であり、沖縄は日本の領土ではないと主張している。

また、一九五〇年五月十五日に書かれた中共の対日講話条約に關しての公式文書が、中共により二〇〇五年に公開されたが、そこに注目すべき記述がある。

- ・琉球はカイロ宣言に基づき中国に返還すべき
- ・北方四島はソ連に帰属することを、中国として断固指示する
- ・対馬は朝鮮に帰属させるべき

二〇〇五年に公開されたという事は、この方針はまだ生きているという中共の主張と受け止められる。

また、「中国は人の住んでいる島は攻めない」という通念があるが、これは嘘であり尖閣だけでなく沖縄本島も危なく、沖縄同胞の覚醒を促す必要がある。新たな脅威は心を巡る戦いでもあり、日本人の心が最後の砦と考える。以上

六十五分間にも及ぶ講演の要約ですから少々長くなりましたが、中西先生はご存じの通り、産経新聞の「正論」にも度々執筆されておられる保守の論客として夙に有名であり、一本筋の通った話に正に背骨が伸びる思いでした。

さて今月も同封していますが十一月十二日に開催の「自衛隊に感謝する集い」への参加と、協賛のご協力を改めてお願い申し上げます。

県外から多数のご来賓をお迎えする都合上、本県関係者も万障繰り合わせてご参加賜り、本大会を成功させるよう重ねてのお力添えをお願いする所存です。また過日、日本会議宮崎より皆様のお手元に、ご協賛金協力のお願いが届いたかと存じますが出費多難の折、お願い事ばかりで誠に恐縮に存じます。

皆様からお預かりしています貴重な会費の中より、恒例の「靖国カレンダー」を今月もまた同封させて頂きますので、残り二ヶ月で今年も終わり等と感慨に耽りつつ、「歳月人を待たず」の古諺を噛み締めて戴ければ幸いです。

呉々も健康にご留意戴き、日本の為、そして宮崎のため共に智恵と汗を流し、僅かな時間と金員の更なるお力添えを賜れば、これに勝る幸せはございません。結びに皆様のご健勝を衷心よりご祈念申し上げます次第です。

平成二十三年十一月一日

宮崎県防衛協会

青年部会

宮崎支部長

小倉和彦